

シャッフルは8月に起きがち

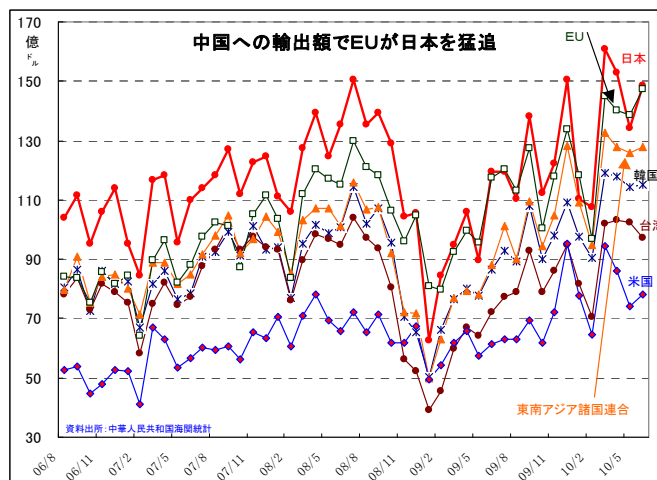
予期しない事が起こりがちな8月を迎える。「近畿地域の景気はゆるやかに回復している～輸出はアジア向けを中心に増加している」(日本銀行『地域経済報告—さくらレポート』2010年7月8日)。日銀短観では大企業製造業の業況判断DIが上昇しており、「景気マインド」の改善が進んでいる。ただ、生産や輸出数量の動きは手放しで安心できる状況ではない。マインドと足元統計との間には微妙な乖離が存在している。

昨年の8月、衆院選で政権党が入れ替わった。大逆転だと言われた。一昨年の8月、わが国の対中輸出額が対米を上回ったことが判明した。3年前の8月、サブプライム問題が表面化して欧州中銀が大規模な資金供給を開始した。4年前の2006年8月、BPは米国で最大の油田であるブルドーベイでパイプライン腐食のために操業を停止した。事故長期化懸念で、NY原油先物価格は最高値に迫った。この月、経営者の44%は景気拡大が「今後1年以上続く」と予想していた。翌年の10月が天井だった。

多くの人が休暇を取得する8月は、職場へ戻って見たら外部環境が一変している風景に遭遇する確率が高い月でもある。マインドと統計との間にある違和感は、「意外な結果」という現実が調整してくれるのが一般的だ。対をなす閻魔王と地藏菩薩が互いに門戸を開くお盆がある月は、カードをきり直して手札を再構築するのに相応しい月なのかも知れない。

薄れゆく日本の存在感

わが国にとって中国は最大の輸入相手国であり、輸出相手国でもある。大雑把に言えば、素材の調達先としては欠かせない存在だし、ハイテク製品の販売先として



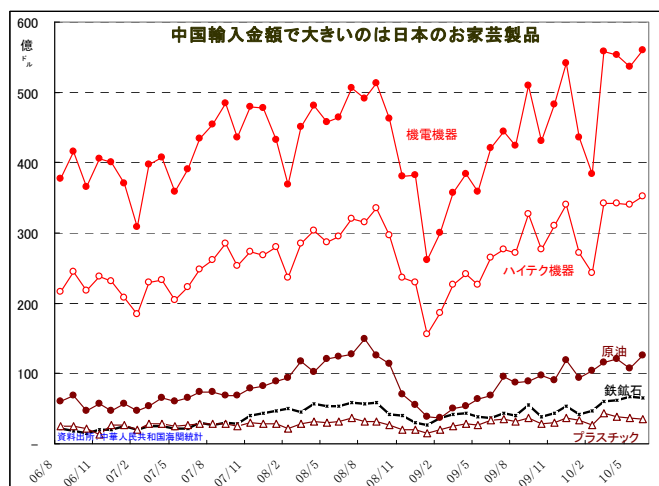
も重要な取引先だ。両国の関係は、競争的であるよりもむしろ補完的な関係にある。中国の輸入額(日本から見た輸出)はこれまで、日本が最大のシェアを占めていた(中国海関統計)。ところが、今年に入ってからEUが猛追し、単月では逆転する月も出てきた。その

背後では、東南アジア諸国連合も存在感を高めてきている。傾向的にはこの動きが

さらに強まりそうだ。有力な交易先である中国に対する日本の存在感は薄くなり始めている。

機電、ハイテクが日本の強み

中国が輸入している産品で実額が大きいのは機電機器(機電産品)とハイテク製品(高新技术産品)。実額では、他を大きく上回っている。この2分野が、日本の存在感

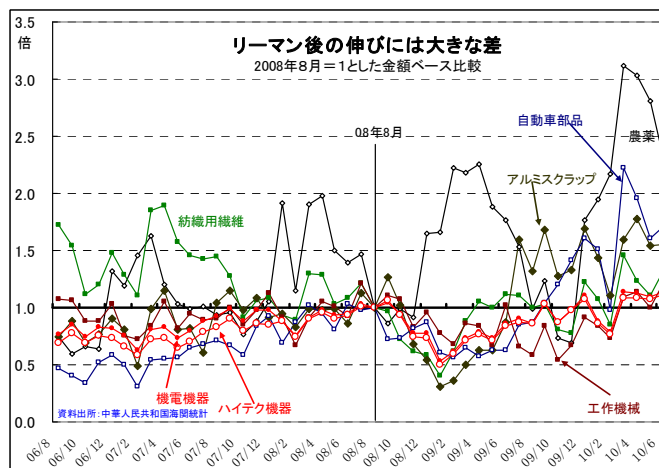


を大きくしていた要因だ。中国の貿易構造は、素材や部品を輸入し、完成品を輸出する加工貿易。このため、輸入は輸出の先行指標と言える。7月10日に公表された中国の統計によれば、6月で輸入が8ヵ月連続の増加になった。他方で、

中国からの輸出は6月で過去最大を記録した。増加は7ヵ月連続。日本から中国への輸出産品で主力であるエレクトロニクス関連で多くを占めているのは部品。この分野に対する需要動向が、日本の地域経済にも濃淡をつけることになって来ている。

需要先が物事を決める

中国側からの需要が強い分野の産業に恵まれていた結果、日中貿易で阪神地域は日本の主力港湾にもなっていた。ただ、その伸び率を見れば、より高いものが登場



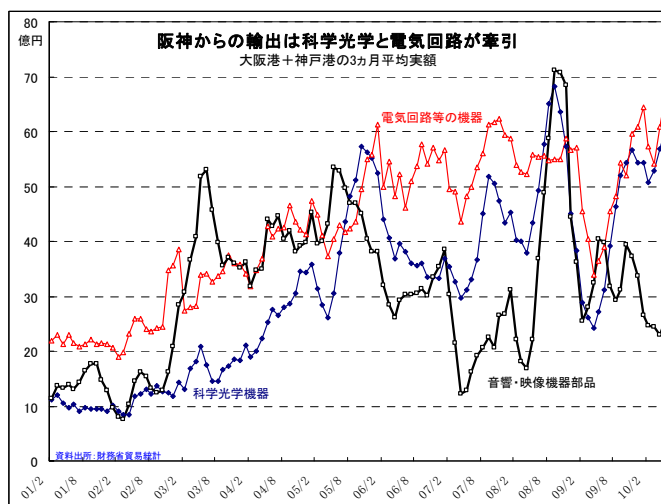
してきている。リーマンショックが勃発した直前月である2008年8月を基準月として、中国の輸入金額推移を見ると、機電やハイテク分野の伸び率は紡織用繊維よりも低い。自動車部品や農業は、より高い伸びを示している。リーマン

後の回復過程で、米国は医療、貴金属・宝飾、食品分野での輸入を増加させた。中

国は穀物や乾燥果実のような内需用と同時に、アルミスクラップやビレット(鋼材)に見られるような輸出用産品を製造するための素材を増やした傾向がある。それを提供する事ができるかどうかで、対中貿易の濃淡に変化が生まれている。

景気循環は対中輸出と連動している

近畿圏からの輸出は回復傾向を強めている。直近統計である5月までの実績では輸出全体が6ヵ月連続の増加に転じている。中国向け輸出に限って見れば、科学光

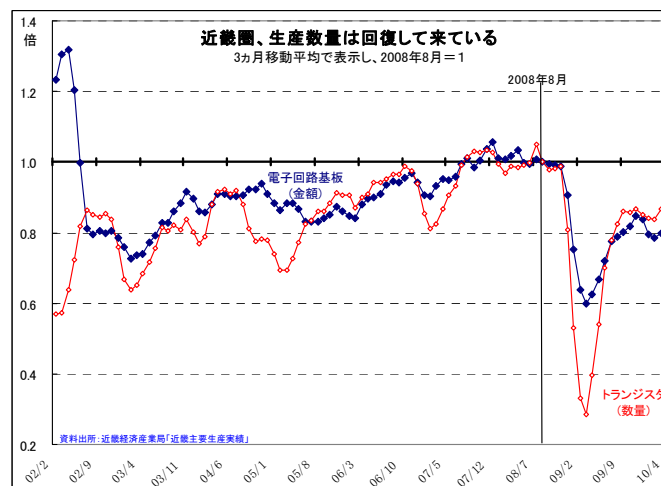


学機器、電気回路等の機器が増加している。阪神港(大阪港と神戸港の合計)からの輸出だけを取り出しても、科学光学機器と電気回路等の機器はいずれもリーマン前の月間記録を5月に更新した。日本における前回の景気循環は2002年1月に拡張が始まり、2007年

10月に山、2009年3月が谷となった(内閣府経済社会総合研究所『景気基準日付について』2010年6月7日)が、この2分野の中国向け輸出は景気循環と一致している。

数量では回復品目が増えてきた

生産側の統計でも、リーマン前を越えるものが出てきている。近畿圏におけるトランジスタの生産量は今年に入ってから増加を続けており、4月には生産個数で記

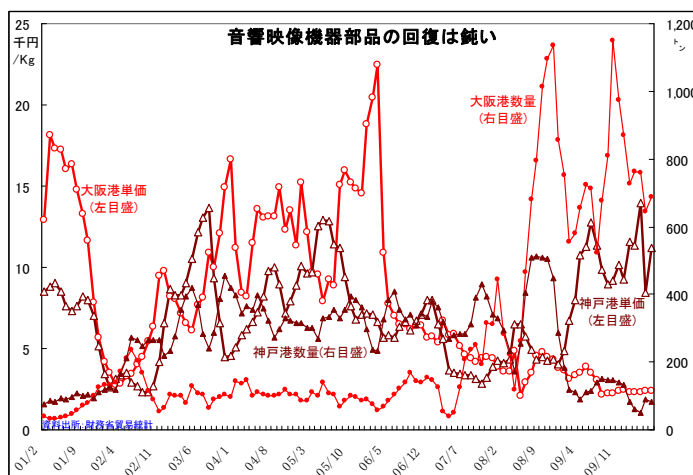


録を更新した。ただ、数量では顕著な回復を見せているものの、金額ベースでの回復は遅れている。電子回路基板の場合、2008年の夏場には毎月110億円程度の生産額だったが、足元では90億円弱。中国向けが牽引しての輸出拡大だが、需

要量の増加程には金額へ反映されていない可能性がある。

成長商品の分野にも変化が生まれている

一連の動きを象徴しているものに、音響映像機器部品がある。中国向け輸出品目

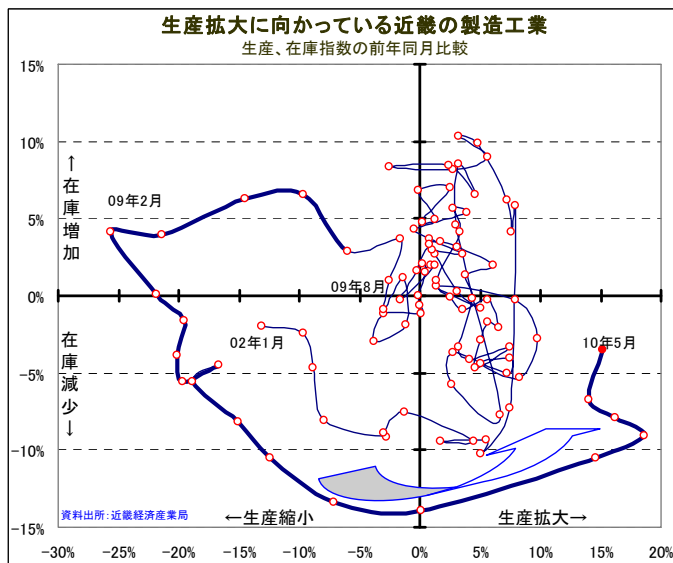


としての比重は大きい、前回の景気拡大期に見せた勢いはない。同じ阪神域内でも、神戸港と大阪港での動向にも違いが生じている。数量が増加傾向にある大阪港では単価が下落した状態だ。単価が回復傾向にある神戸港では数量が弱含みだ。

部品の輸出で勢いを失ってきた音響映像関連だが、完成品の輸入金額は増加傾向にある。輸出品目の消長は、国際的な産業構造の変化を反映している。

分野間でのばらつきが残っている

近畿の製造工業は、全体としては生産が拡大している。ただ、分野間での爬行が大きい。3～5月の生産指数平均を08年8月と比較すると、全体では0.9となおも「リーマン」以前。ところが、半導素子は1.4、その他電気機械が1.5と拡大して



いる。その一方で、自動車部品は0.8、金型が0.9など、1以下の分野も多い。こうした分散の大きさは、先行きの不安定さを示唆している。回復の方向感はどこでもシャッフルされる可能性がある。8月はおも不安定さを残した月かも知れない。(神保)

本資料は、参考情報の提供を目的としたものです。有価証券の売買にかかわる助言・募集や、いかなる契約の締結や解約をも勧誘するものではありません。記載内容は、2010年7月16日までに新聞その他の情報メディアによる報道、民・官調査機関による各種刊行物、公表資料やインターネットホームページ等で公開された資料と、執筆者が独自に調査した結果に基づいて作成していますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。主張や結論は、作成時点での執筆者の判断によるもので、資料発行/配布機関の公式見解を表明するものではありません。掲載情報を利用したことによって生じる、いかなる支出や障害についても、その責任を負いかねます。見解は、その後の状況に応じて予告なく変更されます。

より詳細なデータ、記載内容に対するお問い合わせは、池田泉州銀行東京事務所 03-3284-1253 / 神保 敏明、までお願いします。